

## 人称代名詞「あなた」「おまへ」の研究

著者	杉崎 夏夫
雑誌名	武蔵野大学日本文学研究所紀要
号	6
ページ	40-57
発行年	2018-02-26
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1419/00000895/">http://id.nii.ac.jp/1419/00000895/</a>

# 人称代名詞「あなた」「おまへ」の研究

杉崎 夏夫

## 1、はじめに

『東海道四谷怪談』は四世鶴屋南北によって書かれた歌舞伎脚本で、文政八年七月に江戸中村座で初演されたものである。四世鶴屋南北は、宝暦五年に紺屋の型付職人の次男として日本橋新乗物町に生まれた。『東海道四谷怪談』を書いた当時は七十一歳であった。四年後の文政十二年に没するので晩年の作品といえる。生家が芝居町の葺屋町市村座、堺町中村座に近く、幼時より芝居小屋に入りにしていたという。最初は役者であったが途中で狂言作者に転向し、舅の名前である鶴屋南北を継ぐまでの約三十年間は、名を勝俵蔵という名前を使っていた。なかなか作者としての地位は上がらず、長い間下ツ端として修行を積んでいた。この間滑稽本くらしいの短い幕である「小幕」を書いており、この題材にふさわしい種々の材料を得るために社会へ鋭利な注意と観察を向けるようになったようである。後年の世話狂言や滑稽的な要素はここからきていると考えられる。『東海道四谷怪談』ではお岩についての巷説や実際に起こった戸板流し事件など、様々な場で、社会の関心が向けられている

時事を織りまぜた内容となっている。このように常に社会へ関心を持ち庶民の暮らしをよく観察していたことや、彼自身が江戸で生まれ育ったという点からも江戸の言葉に通じていたことは当然であろう。

そこで『東海道四谷怪談』を研究資料として調査をすすめる、当時の人称代名詞について考察を加えることとする。

## 2、研究方法について

表現主体がその表現をするにあたり、自分自身・表現の相手・話題の人物などそれぞれとの種々様々な関係を正確に把握し、それを表現形式に反映させる。このような言語表現に現れる待遇意識を探り明らかにすることによって、当時の各語の表現価値を知り、また、それらに対応する各語との関係についても論及していきたいと考える。

言語の待遇表現を考えると、特に待遇意識が明確に表れるのは自称・対称代名詞である。したがって先ずは、自称・対称代名詞の待遇価値を明確にすることによって当時の人称代名詞の

図表 A

対称代名詞	男	女	男女 計
おまへ	63(2)	64(2)	127
あなた	23(6)	22(2)	45
こなた	37(6)	5	42
そなた	18(8)	16	34
おのれ	23(5)	0	23
てまへ	20(2)	0	20
われ	16(2)	1	17
おめへ	11(1)	3	14
こなさん	7(3)	5	12
そち	10(2)	1	11
うぬ	8	2	10
きさま	10(1)	0	10
てめへ	10(3)	0	10
おぬし	9(2)	0	9
きでん	9	0	9
そのはう	9	0	9
きこう	8	0	8
わがみ	1	6	7
あなたさま	2	4(1)	6
おまへさま	3	3	6
おまへさん	2	4(1)	6
こちのひと	1(1)	5(1)	6
わりやア	6(1)	0	6
あなたがた	2(2)	3	5
うぬら	5	0	5
わりや	5	0	5
おまへがた	3	1	4
そのもと	4	0	4
おてまへ	3	0	3
おのれら	2	0	2
こなさんたち	0	2	2
こなたしゅう	1	1	2

まず、『東海道四谷怪談』に現れる自称・対称代名詞の各語について使用数を調査した。これらの語の中には、用例が非常に少なくその特徴を判断することの困難なものや、江戸語の代名詞としては特殊と思われるものもあるため、それらの代名詞

3、「おまへ」  
対称代名詞「おまへ」の『東海道四谷怪談』における使用例数は百二十七例あるが、そのうち四例は話し手が平素から使用

使い方が分かると考える。そこで、その待遇価値の調査方法として、すべての人称代名詞を収集し、各人称代名詞ごとに、次の事項についての調査をするという方法で行う。

① 自称との比較において把握された対称

○ 対称代名詞

○ 対称の動作・存在に関する動詞・助動詞

② 対称との比較において把握された自称

○ 自称代名詞

○ 自称の動作・存在に関する動詞・助動詞

は除外した。その結果を整理したものが図表 A である。  
(図表 A 参照)  
そこで図表 A に示した『東海道四谷怪談』中の各代名詞を見ると、対称代名詞では特に「おまへ」・「あなた」・「こなた」・「そなた」・「おのれ」・「てまへ」・「われ」・「おめへ」などの使用例が多い。

本稿では、先ずは用例数の多い対称代名詞「おまへ」・「あなた」およびその複数を表す語「おまへがた」・「あなたがた」についての考察を加えることとし、先述の研究方法に従って各語ごとにその使用状況を調べていくこととする。

している言語表現であるとは認められないものである。これは、浪人がわざと町人の真似をしているもの、表記は「おまへ」とあるが「おめへ」と発音すると注のあったもの、「夢の場」といったある人物の見てゐる夢の中の場面で使用された表現等である。これらの他の人物の口真似や、夢の中の場面での表現などに現れる場合は、これらは直接会話の場を構成する「話し手↓聞き手」の關係において使用されたものではないため、本稿では、特別な表現（特別用法）として区別した。また、「おまへ」の用例は百二十三例中六十一例が男性、六十二例が女性の使用例である。

次に、これらの使用例中のいくつかの代表例を挙げる。（１）（６）までは男性の使用例、（７）（１１）は女性の使用例である。

（１） 直助↓お袖

コウ、お袖さん、坊主が憎けりや袈裟までと、おまへの言ふのも尤もだが、今のやふに言つた日にやア、すぐに敵にけどられるわな。しかし、かう言うこのわしが、以前はおまへの親御、四谷左門様とは同じ家中の、奥田將監が下部の直助。御短慮とはいひながら御家中は皆ちりぐ。わづか小者のわしまでも、藤八五文の薬売り。おれはまだしも、左門様のお娘御が、今では楊枝見世の雇い女。これも時世とあきらめて、貧しい暮らしをとまぐに……おまへがうんとさへ言へば、おれもまた、三度飛脚へ狐の恐いた

やうな形をして歩きもしねへハ。なんぞおつりきな商売を見つけて、おめへと二人、こんなところへも出しちゃアおかねへハ。どうだな（ P 29・9・11 P 30・4）

（２） 宅悦↓お岩

愛想をつかして伊藤の髯様、おまへと手を切るその為、どうぞ手まへは女房と、間男致せとお頼みを、ならぬと申すとすつば抜き、よんどころなう今のたわむれ。おまへの着類をそのように、非道にそいでござつたも、ありやうはすぐに今夜が内祝言。髯の支度の入替に、持つてござつたおまへの代物。その上おまへを私に、色をにかけて逃げてくれろとお頼みは、すなはち嫁をこの内へ、連れて来るにもおまへが邪魔。それゆゑわたしを頼んだ間男。その御顔ではどうして色に。イヤ御免だ（ P 181・2・4・6・8）

（３） 民谷伊右衛門↓お熊

これは（あなた様のこゝろざし、まづは大慶。しかし、喜兵衛と娘のお梅殺した事は拙者が朋輩、官蔵とかれが小者にぬりつけおけば、よもやこの後この身に難儀もござるまいが、いはゞおまへの気休めに、その卒塔婆、こゝらへ立て、おかつしやりませ（ P 213・11）

（４） 民谷伊右衛門↓お熊

おまへもわしも熱氣の時刻。冷えないやうになされませ（ P 381・12）

(5) 直助↓民谷伊右衛門

はて忘れなされたか。わしが女房の姉と言ふのは四谷の娘のあのお岩。わしが女房は妹のお袖。そんならまんざらおまへとわしは敵同士。逢うた幸ひ女房が姉の敵の民谷、サア、立ち上かつて勝負さつしやい伊右衛門殿。ト言ふところだが言はねへの。そのかはりにはわしがまた、出世の咄がある時は、今のおまへの貰つた書物、借りに行きやすその時必ず知らねへ顔をなさいますなよ。

(P 215 - 5・8)

(6) 庄七↓小塩田又之丞

言わないではサ。モシ、おまへは見かけに寄らない盗みをさつしやりまするな……ハテ、腹をお立てなされますな。……コレ、御らうじませ。おまへの引つけてござる布子、こにある掻卷蒲団、店の符帳が付いてをりますぞへ。私どもの蔵へ泥坊がはいつて、外の物には手もつけず、この三品とたゞ今申したソウキセイ、右の四品が紛失しました。三品は早速こゝで見当たりましたが、モシ、とてももの事に薬もこゝへ出さつしやるがようござります

(P 320 - 9・13)

(7) お梅↓尾扇

尾扇さん、おまへも齒磨を、お取りなさんせいナア

(P 26 - 9)

(8) お岩↓民谷伊右衛門

わたしが顔付けは、よいか悪いかわらねども、気持はや

つぱり同じ事。一日あけしいひまもなう、どうで死ぬるでござんせう。死ぬる命は惜しまねど、産れたあの子が不憫

に思つて、わたしや迷うでござんせう。モシ、こちの人、おまへわたしが死んだなら、よもや当分

(P 169 - 11)

(9) お袖↓庄七

ぢやというて、わたしやそのやうな物なら御免ぢやわいな。したがモシおまへ、この着る物、どこから買つて来やしやんした。

(P 235 - 6)

(10) お袖↓佐藤与茂七

エ、わたしよりおまへが面妖な。そんならきつと幽霊ぢやござんせぬな。サア、こちへはいりなさんせ……ほんに幽霊ぢやない。真正正銘寸分違はぬ与茂七様ぢや。……モシ、わたしやおまへが人手にかゝつて死なしやんしたと思つたゆゑ。エ、今一足早く来て下さんすりやよかつたに、わたしや面目ない。

(P 277 - 1・5)

(11) お花↓仏孫兵衛

おまへが最前婦人には、お寺へ寄つて来るやうにと言わしやんしたゆゑ、何心なう法乗院へ行て、親父が願いました品をと言つたれば、方丈様が御手づから、下さんした白木の位牌。不思議な事と手に取り見れば、コレ俗名小平、施主は親御のおまへの名。恠りせまいか、わたしやもう、その場ですぐに死にたうござりましたわいなア

(P 337 - 4・7)

これらの用例を先に述べた研究方法に基づいて調査し、用例に現れている対称代名詞「おまへ」の対応語を整理し、その結果を図示すると対応表Ⅰ図となる。

(対応表Ⅰ図参照)

この対応表に表れているように対称代名詞「おまへ」の語群では、対称の動作・存在に関する動詞には、平常語に属す動詞(以後平常動詞とする)の「出る」に「する」の尊敬語「さっしやる」の付いた「出さっしやる」や、相手に丁寧な意を表す助動詞「まする」の付いた形「さっしやりまする」。「引っかける」に「いる」の丁寧語「ござる」の付いた「引っかけてござる」。また、「言う」「貰った」などの平常動詞のみの場合もある。命令表現では「くなされませ」「くなさいまする」などの「する」の尊敬語「なさる」に丁寧の意を表す助動詞「ます」や「まする」が付いたもの。「立てておかっしやりませ」のような「立てておく」の促音便に尊敬を表す助動詞「しやる」+丁寧の助動詞「ます」の付いた形。尊敬語「御覧す」の音便化した「御らうず」に助動詞「ます」の付いた形などが挙げられる。また、対応する自称における動作・存在に関する動詞の「歩きもしねへ」「出しちやおかねへ」「言はねえ」は、「する」「おく」「言ふ」の未然形に否定の助動詞「ない」の音転「ねへ」が付いた形。「行く」に丁寧の助動詞「ます」の音転「やす」の付いた「く行きやす」。また、丁寧を表す「ござる」の付いた「そいでござった」など敬語表現との対応も見受けられる。

これらは男性の使用であったが、次に女性の使用を見ていく。

「買う」の音便化した「買うて来る」や「死ぬ」「言う」などの平常動詞に尊敬を表す「しゅんす」の付いたもの。「来る」に尊敬語「下さる」と「する」の仮定形「すれば」の音転「すりや」の付いた形「来て下さんすりや」等が挙げられる。

命令表現は平常動詞「はいる」に尊敬語「なさんす」の命令形の付いた「はいりなさんせ」や、更に丁寧の意である接頭語「お」が付いた「お取りなさんせい」が対応する。

対応する自称における動作・存在に関する動詞には、「思う」「死んだ」「取り見れば」といった平常動詞との対応も見られるが、「くござんす」に推量の助動詞「う」の付いた「死ぬるでござんせう」「迷うでござんせう」、もしくは終助詞「わい」+間投助詞「なあ」の付いた「死にたうござりましたわいナア」といったものとの対応も見られる。

このように、「おまへ」の語群の対応語は、平常動詞との対応も見られるが、敬語表現との対応が基本となっている。

次に「おまへ」がどのような待遇意識により成り立っているかを知るためには、この対称代名詞を使用している人物と「おまへ」と呼ばれている人物との間に存在する身分的な関係把握しておく必要があると考え、どのような人物間において使用されている代名詞かを調査し、図表Bに表した。

(図表B参照)

この百二十三例に表れた表現は、その場面に存在する様々な言語条件に影響された結果であり、単に身分的な関係だけに基づいて使用されたものでないことは当然であるため、図表Bに

対応表1図「おまへ」

女				男				対 称		
お花↓仏孫兵衛	お袖↓与茂七	お袖↓庄七	お岩↓伊右衛門 こちのひと	お梅↓尾扇	庄七↓又之丞 おまへ	直助↓伊右衛門 おまへ	伊右衛門↓お熊 おまへ あなた様	宅悦↓お岩 おまへ	直助↓お袖 おまへ おめへ	話し手↓聞き手 代名詞
言わしやんした	来て下さんすりや 死なしやんした	買うて来やしやんした			出さつしやる 引つかけてござる	貰った さつしやりまするな			言う 言った 言え	動詞
					しまする ませ	します	ませ			助動詞
	はいりなさんせ			お取りなさんせいナア	御らうじませ	勝負さつしやい なさいますな	立てておかつやりませ なされませ			命令表現
わたしや	わたしや	わたしや	わたしや		わたくしども	わし	わし	わたくし わたし	わし おれ	代名詞
死にたうござりましたわ いナア	言うたれば 取り見れば 悔いせまいか	思うた	死んだ 迷うでござんせう		見当たりました	言ふ 言はねへ 借りに行きやす	ぬりつけおく	申す そいでござった	歩きもしねへ 出しちやおかねへ	自 称 動詞

図表B

代名詞	頁	行	性別	話し手	聞き手	性別	待遇	備考
おまへ	24	10	男	直助	お袖	女	—	
おまへ	29	9	男	直助	お袖	女	—	
おまへ	29	11	男	直助	お袖	女	—	
おまへ	30	4	男	直助	お袖	女	—	
おまへ	30	14	男	直助	お袖	女	—	
おまへ	64	6	男	直助	お袖	女	—	
おまへ	64	10	男	直助	お袖	女	—	
おまへ	80	7	男	宅悦	直助	男	—↑	
おまへ	114	1	男	直助	お袖	女	—↑	
おまへ	114	2	男	直助	お袖	女	—↑	
おまへ	114	5	男	直助	お袖	女	—↑	
おまへ	126	4	男	佐孫兵衛門	宅悦	男	—	
おまへ	131	8	男	小仏小平	宅悦	男	—↑	
おまへ	150	8	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	165	6	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	176	11	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	176	13	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	177	3	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	177	14	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	178	12	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	178	14	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	179	6	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	179	7	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	179	8	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	180	5	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	180	6	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	181	2	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	181	4	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	181	6	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	181	6	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	181	8	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	182	6	男	宅悦	お岩	女	↑	
おまへ	185	14	男	宅悦	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	188	14	男	小仏小平	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	190	8	男	小仏小平	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	212	7	男	民谷伊右衛門	お熊	女	↑	
おまへ	213	11	男	民谷伊右衛門	お熊	女	↑	
おまへ	214	14	男	直助	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	215	5	男	直助	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	215	8	男	直助	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	233	7	男	長藏	お袖	女	—↓	
おまへ	235	1	男	庄七	お袖	女	—↓	
おまへ	235	3	男	庄七	お袖	女	—↓	
おまへ	236	6	男	長藏	お袖	女	—↓	
おまへ	256	9	男	直助	宅悦	男	—	
おまへ	257	5	男	宅悦	お袖	女	—	
おまへ	258	1	男	宅悦	お袖	女	—	
おまへ	258	8	男	宅悦	お袖	女	—	
おまへ	260	3	男	宅悦	直助	男	—↑	
おまへ	260	6	男	宅悦	お袖	女	—	
おまへ	260	14	男	宅悦	お袖	女	—	
おまへ	274	9	男	直助	佐藤与茂七	男	—	
おまへ	299	8	男	佐孫兵衛門	小堀田又之丞	男	↑	
おまへ	299	9	男	佐孫兵衛門	小堀田又之丞	男	↑	
おまへ	320	9	男	庄七	小堀田又之丞	男	↑	
おまへ	320	13	男	庄七	小堀田又之丞	男	↑	
おまへ	374	14	男	三吉	進藤源四郎	男	↑	
おまへ	376	8	男	民谷伊右衛門	進藤源四郎	男	↑	
おまへ	378	6	男	民谷伊右衛門	お熊	女	↑	
おまへ	381	12	男	進藤源四郎	お熊	女	↑	
おまへ	394	7	男	伴助	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	26	9	女	お梅	尾扇	男	↓	
おまへ	65	3	女	お袖	直助	男	—↓	

表れた結果が、そのまま「おまへ」の待遇意識を表しているとは言えない場合もあるが、その代名詞を使用する上での最も基礎となる待遇意識であることには間違いないと考える。

そこで、この基本的な待遇意識を明らかにした上で、様々な言語条件の影響を考えていくことにする。まずは、この図表Bでは、その身分関係を記号(↑・目上 一・対等 ↓・目下)で表した。

特筆しておく使用例としては、同じ人物同士でも待遇意識に変化が起る例として「直助↓お袖」「お袖↓直助」の関係が挙

げられる。この二人の人物は幕によってそれぞれの立場に変化が生じるものである。直助は以前、塩治家中の武士奥田将監の中間であったが、品行の悪さにより主人から勘当されたという経緯がある。一方、主人であった奥田将監とお袖の義理の親である四谷左門とは同じ家中の家来であったため、同僚という関係であった。したがって、お袖から見れば、父親である左門の同僚の家来にあたる直助は目下の存在である。また、お袖には佐藤与茂七という配偶者がいたので、直助がしつこく言い寄ってくることは迷惑であった。しかし、塩治家の解体により、お



袖は与茂七と離れ茶店や地獄宿で働かざるをえない状況となる。そのような中、与茂七と思われる人物が殺された。途方に暮れるお袖に言葉巧みに近づいた直助は、仮の夫婦として暮らすことを提案し、お袖もそれに承諾する。ここまですが初日序幕の内容で、後日序幕では仮の夫婦(世間的には夫婦)として登場することとなる。そこで、お互いの待遇関係が逆転することになるのである。なお、直助に関しては更に後述で触れることにする。

図表Bによると対称代名詞「おまへ」は、男性の使用の場合

は目上やや目下の使用が多いが、ほぼ対等の対称に対しては使用されていることが分かる。また「長蔵↓お袖」「庄七↓お袖」の場合は、お袖が女性のため、対等かやや目下として扱っている。

(1) 例は先述の「直助」の使用例であるが、「おまへ」の外に「おめへ」の使用が見られる(「おめへ」に関しては、用例が少なく本稿では取り扱わない)。対応表1図を見ると対称の動作・存在に関する動詞は、先述したように、敬語表現との対応が一般的であるが、直助だけが「言う」などといった平常動詞との対応となっている。また、共用されている対称代名詞「お

代名詞	頁	行	性別	話し手	聞き手	性別	待遇	備考
おまへ	72	8	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	73	10	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	74	3	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	76	9	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	77	5	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	77	10	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	80	13	女	お色	直助	男	↑	
おまへ	105	7	女	お袖	お岩	女	↑	
おまへ	105	9	女	お袖	お岩	女	↑	
おまへ	107	3	女	お袖	お岩	女	↑	
おまへ	107	11	女	お袖	お岩	女	↑	
おまへ	108	14	女	お岩	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	145	13	女	お岩	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	146	8	女	お岩	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	147	14	女	お岩	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	169	11	女	お岩	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	170	4	女	お岩	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	170	9	女	お岩	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	170	13	女	お岩	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	171	1	女	お岩	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	171	8	女	お岩	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	173	7	女	お岩	民谷伊右衛門	男	↑	
おまへ	208	6	女	お蔵	仏孫兵門	男	↑	
おまへ	231	6	女	お袖	庄七	男	↑	
おまへ	231	13	女	お袖	長蔵	男	↑	
おまへ	234	9	女	お袖	庄七	男	↑	
おまへ	235	6	女	お袖	庄七	男	↑	
おまへ	237	12	女	お袖	次郎吉	男	↓	
おまへ	238	8	女	お袖	次郎吉	男	↓	
おまへ	240	9	女	お袖	仏孫兵門	男	↑	
おまへ	240	10	女	お袖	仏孫兵門	男	↑	
おまへ	242	5	女	お袖	仏孫兵門	男	↑	
おまへ	247	8	女	お袖	直助	男	↑	
おまへ	251	1	女	お袖	直助	男	↑	
おまへ	251	14	女	お袖	直助	男	↑	
おまへ	252	7	女	お袖	直助	男	↑	
おまへ	252	13	女	お袖	直助	男	↑	
おまへ	257	4	女	お袖	宅悦	男	↑	
おまへ	263	14	女	お袖	宅悦	男	↑	
おまへ	268	5	女	お袖	直助	男	↑	
おまへ	268	9	女	お袖	直助	男	↑	
おまへ	269	6	女	お袖	直助	男	↑	
おまへ	276	11	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	277	1	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	277	5	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	281	9	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	285	13	女	お袖	直助	男	↑	
おまへ	286	3	女	お袖	直助	男	↑	
おまへ	286	4	女	お袖	直助	男	↑	
おまへ	287	10	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	294	5	女	お花	お熊	女	↑	
おまへ	304	9	女	お花	赤垣伝蔵	男	↑	
おまへ	321	13	女	お熊	小堀田又之丞	男	↑	
おまへ	322	7	女	お熊	小堀田又之丞	男	↑	
おまへ	337	4	女	お花	仏孫兵門	男	↑	
おまへ	377	7	女	お花	仏孫兵門	男	↑	
おまへ	344	6	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	344	9	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	344	10	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	345	9	女	お袖	佐藤与茂七	男	↑	
おまへ	(特)71	4	男	佐藤与茂七	お袖	女	↓	口真似
おまへ	(特)219	7	男	直助	民谷伊右衛門	男	↑	注(おめへと発音)
おまへ	(特)365	3	男	お岩(夢)	民谷伊右衛門	男	↑	夢の場面
おまへ	(特)368	14	女	お岩(夢)	民谷伊右衛門	男	↑	夢の場面

図表C

代名詞	頁	行	性別	話し手	聞き手	性別	待遇	備考
うぬら	80	10	男	直助	宅悦・お色	男	女	一↓
うぬら	81	2	男	直助	宅悦・お色	男	女	一↓
うぬら	81	10	男	直助	佐藤与茂七・お袖	男	女	一↓
うぬら	82	5	男	直助	佐藤与茂七・お袖	男	女	一↓
うぬら	83	11	男	直助	佐藤与茂七・お袖	男	女	一↓
おぬし	266	8	男	直助	お袖	女		↓
おぬし	268	11	男	直助	お袖	女		↓
おぬし	268	14	男	直助	お袖	女		↓
おぬし	286	9	男	直助	お袖	女		↓
おまへ	24	10	男	直助	お袖	女		↓
おまへ	29	9	男	直助	お袖	女		↓
おまへ	29	11	男	直助	お袖	女		↓
おまへ	30	4	男	直助	お袖	女		↓
おまへ	30	14	男	直助	お袖	女		↓
おまへ	64	6	男	直助	お袖	女		↓
おまへ	64	10	男	直助	お袖	女		↓
おまへ	114	1	男	直助	お袖	女		↓
おまへ	114	2	男	直助	お袖	女		↓
おまへ	114	5	男	直助	お袖	女		↓
おまへ	214	14	男	直助	民谷伊右衛門	男		↑
おまへ	215	5	男	直助	民谷伊右衛門	男		↑
おまへ	215	8	男	直助	民谷伊右衛門	男		↑
おまへ	219	7	男	直助	民谷伊右衛門	男		↑
おまへ	256	9	男	直助	宅悦	男		一
おまへ	274	9	男	直助	佐藤与茂七	男		一↑
おめへ	31	2	男	直助	お袖	女		↓
おめへ	31	7	男	直助	お袖	女		↓
おめへ	61	2	男	直助	お袖	女		↓
おめへ	65	1	男	直助	お袖	女		↓
おめへ	65	1	男	直助	お袖	女		↓
おめへ	86	5	男	直助	藤八	男		一↑
おめへ	103	13	男	直助	民谷伊右衛門	男		↑
おめへ	109	6	男	直助	お袖	女		↓
こなた	257	8	男	直助	宅悦	男		一
こなた	261	3	男	直助	宅悦	男		一
こなた	274	12	男	直助	佐藤与茂七	男		一
こなた	275	11	男	直助	佐藤与茂七	男		一
こなさん	282	5	男	直助	佐藤与茂七	男		一
そなた	266	13	男	直助	お袖	女		一↓
そなた	267	5	男	直助	お袖	女		一↓
そなた	269	2	男	直助	お袖	女		一↓
そなた	286	7	男	直助	お袖	女		一↓
てまへ	218	6	男	直助	お弓	女		↓
てまへ	246	9	男	直助	お袖	女		一↓
てまへ	246	13	男	直助	お袖	女		一↓
てまへ	247	5	男	直助	お袖	女		一↓
てまへ	250	11	男	直助	お袖	女		一↓
てまへ	252	1	男	直助	お袖	女		一↓
てまへ	252	14	男	直助	お袖	女		一↓
てまへ	254	6	男	直助	お袖	女		一↓
てめへ	246	3	男	直助	お袖	女		一↓
てめへ	250	6	男	直助	お袖	女		一↓
わりやア	285	12	男	直助	お袖	女		一↓

めへ」は、一般的に「おまへ」よりも敬意が低いとされている語だが、この場合併用された「おまへ」とは、特に待遇価値が区別されているとは考えられず、対応語にも違いはないようである。また、自称の代名詞も「わし」や「おれ」といった語が対応されており、他の使用例が「わたくし」「わたし」等が対応しているのに対して、明らかな差異が見られる。このように直助の使用例には、話し相手に対しての敬意は感じられない。そこでこの点を明らかにするために、直助の使用している全の対称代名詞を調査し、次の図表Cに示す。

(図表C参照)

図表Cより、直助はほとんどの人物に対し対等以下の扱いをし、敬意を払っていないことが分かる。直助については前述したように、品行の悪さにより解雇された経歴もあり、一般的な人物からは外れた特殊な人物像として描かれていることから、ことば遣いも下品でぞんざいな表現をしていると考えられる。ここまでは男性の使用について述べてきたが、次に女性の場合を見てみると、男性の使用と同様にやや目上か目上に対しての使用が多いが、ほぼ対等の対称に対しても使用されているこ

図表D

代名詞	頁	行	性別	話し手	聞き手	性別	待遇	備考
あなた	69	8	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
あなたがた	27	5	女	お袖	喜兵衛・お梅等	男 女	↑	
おまへ	65	3	女	お袖	直助	男	→↓	
おまへ	72	8	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまへ	73	10	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまへ	74	3	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまへ	76	9	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまへ	77	5	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまへ	77	10	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまへ	105	7	女	お袖	お岩	女	→↑	
おまへ	105	9	女	お袖	お岩	女	→↑	
おまへ	107	3	女	お袖	お岩	女	→↑	
おまへ	107	11	女	お袖	お岩	女	→↑	
おまへ	231	6	女	お袖	庄七	男	→↑	
おまへ	231	13	女	お袖	長蔵	男	→↑	
おまへ	234	9	女	お袖	庄七	男	→↑	
おまへ	235	6	女	お袖	庄七	男	→↑	
おまへ	237	12	女	お袖	次郎吉	男子	↓	子供
おまへ	238	8	女	お袖	次郎吉	男子	↓	子供
おまへ	240	9	女	お袖	仏孫兵門	男	→↑	
おまへ	240	10	女	お袖	仏孫兵門	男	→↑	
おまへ	242	5	女	お袖	仏孫兵門	男	→↑	
おまへ	247	8	女	お袖	直助	男	→↑	
おまへ	251	1	女	お袖	直助	男	→↑	
おまへ	251	14	女	お袖	直助	男	→↑	
おまへ	252	7	女	お袖	直助	男	→↑	
おまへ	252	13	女	お袖	直助	男	→↑	
おまへ	257	4	女	お袖	宅悦	男	→	
おまへ	263	14	女	お袖	宅悦	男	→	
おまへ	268	5	女	お袖	直助	男	→↑	
おまへ	268	9	女	お袖	直助	男	→↑	
おまへ	269	6	女	お袖	直助	男	→↑	
おまへ	276	11	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまへ	277	1	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまへ	277	5	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまへ	281	9	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまへ	285	13	女	お袖	直助	男	→↑	
おまへ	286	3	女	お袖	直助	男	→↑	
おまへ	286	4	女	お袖	直助	男	→↑	
おまへ	287	10	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまへ	344	6	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまへ	344	9	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまへ	344	10	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまへ	345	9	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
おまえがた	237	5	女	お袖	長蔵・庄七	男	→↑	
おまえさん	232	7	女	お袖	○(名なし)	男	→↑	
おまえさん	239	12	女	お袖	仏孫兵門	男	→↑	
こちのひと	79	6	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
こちのひと	91	7	女	お袖	佐藤与茂七	男	→↑	
こちのひと	285	11	女	お袖	直助	男	→↑	
こなさん	114	4	女	お袖	直助	男	→↓	
そなた	30	2	女	お袖	直助	男	→↓	
そなた	30	7	女	お袖	直助	男	→↓	

とが分かる。

まず「お梅・尾扇」の場合は、尾扇は医師であるため多少の身分差はあると思われるが、お梅は武家の娘であり、尾扇はそこに雇われている医師であるため目下としている。また「お袖・次郎吉」については、子供に対しての会話であるため、他の大人に対しての表現意識とは異なることも考えられる。そこで先ずお袖が平素使用している対称代名詞を明らかにするために、お袖の使用している全ての対称代名詞を調査し、次の図表Dに示す。

(図表D参照)

図表Dより、お袖がもつとも多用している対称代名詞は「おまへ」である。待遇が目下である例は、前述の直助以外には見られないため、断定することが難しい点もあるが、おおむねどのような相手にでも平素使用する対称代名詞は「おまへ」であると考えることができるとする。また、次郎吉は子供であることから身分関係は目下としてあるが、子供に対してであるから優しく丁寧な言葉づかいをしているとも考えられるため、「おまへ」を使用したものだと思われる。

よって、対称代名詞「おまへ」の語群の特徴は、男性語・女性語とも目上かやや目上に対して使用することが基本であると考えられるが、ほぼ対等の対称に対しても使用されることもある。また、その動作・存在を表す語は、男性語では「なさる」や「さっしゃる」、女性語でも「しゃんす」などといった敬語表現が基本的な対応となっていると考えられる。

#### 4、「おまへがた」

「おまへがた」の使用例は四例あり、そのうち三例は男性の用いたもの、一例が女性の用いたものである。使用数が少ないが、前項で扱った「おまへ」の複数形であるため、「おまへ」と同様の待遇表現であるかを考えておきたい。

次に使用例を全て挙げる。

#### (12) 宅悦↓直助・お袖

イヤモシ、いづぞや中田甫の騒動はまことに珍事中天な事でござりましたネ。いつたいあの一件は……ハ、ア、あの咄は禁句かね。しかしおまへ方がかうして夫婦になつてゐるといふのも、仲人は人知らずわしがしたのだ。なんで今夜はしつかりと御馳走がありやせうネ (P 259-1)

#### (13) 宅悦↓直助・お袖

ハ、ア、そんならおまへ方、縁でもござるかネ

#### (14) 浪藏↓甚太・半六

さう言へば、おまへ方も二本差しで、二百石も取つた衆

だが、今では一日が又兵衛取りの職人とは、洒落た身の上でござるの (P 372-11)

#### (15) お袖↓長藏・庄七

おまへ方とはいさうに、そのよな事言うて、泣かしてからに (P 237-5)

女性の使用例は(15)例のみであり、資料不足のため、以後男性語についてのみ扱うことにする。また、男性語も用例の不足のため明確なことは言及できないが、挙げられた用例に基づき推測を加える。

まず、用例に現れた対応語を図表に整理すると、対応表2図になる。

#### (対応表2図参照)

このように、二例のどちらにも丁寧語の「ござる」が対応している。また「なつてゐる」「取つた」という平常動詞も見受けられる。文末を確認すると「ある」に丁寧の助動詞「ます」の音転した形「やす」がついた「ゝがありやす」等が対応している。「取つた」の場合も文末では丁寧語の「ござる」の付いた「洒落た身の上でござるの」が対応している。先の「ゝありやせうネ」は「ます」の音転した「やす」が使用されているため、敬意はやや低くなつてはいるが敬語表現であることに変わりはなく、また、他の使用例を見ても敬語表現との対応が基本となつていられる。

次に、話し手と聞き手の待遇関係を確認してみる。

#### (図表E参照)

対応表2図「おまへがた」

男	話し手→聞き手	代名詞	動詞	対称	命令表現	代名詞	自称
浪蔵↓甚太 半六	おまへがた	ござりましたネ なつてゐる ありやせうネ ござるかね 取つた ござるの	ござりました ゝました ゝやせう			わし	ゝした

このように図表Eより、どちらも待遇関係としてはやや目上の待遇となっている。

これらより「おまへがた」の語群は、「ゝござる」といった敬語表現との対応を基本とし、やや目上に対して使用する語であると考えられる。また、先述の図表Bにおいても、「宅悦↓直助」「宅悦↓お袖」については使用例が見られるため、同じ話し手と聞き手の関係において、両者が使用されていることも確認されることから、「おまへ」と「おまへがた」は同種の待遇段階であることが推測できる。よって、「おまへ」の複数形の表現であると考えられる。

図表E

代名詞	頁	行	性別	話し手	聞き手	性別	待遇	備考
おまへがた	259	5	男	宅悦	直助・お袖	男 女	一↑	
おまへがた	262	1	男	宅悦	直助・お袖	男 女	一↑	
おまへがた	372	11	男	浪蔵	甚太・半六	男	一↑	
おまへがた	237	5	女	お袖	長蔵・庄七	男	一↑	

## 5、「あなた」

『東海道四谷怪談』における「あなた」の使用例は、四十五例である。前項同様、いくつかの使用例を挙げ、考察を加える。

### (16) 尾扇↓お梅

イヤ、愚老はチト心願の儀がござって、楊枝菌磨なぞは断ち物でござりまするあなたのお土産には、アレ、あそこにある役者の紋所を書きましたのではどうでござります。おほかた、梅幸が団十郎なぞが、御意に入りましたらうな

(P 26-11)

### (17) づぶ六↓民谷伊右衛門

モシ、あなた、お知る人かは存じませぬが、わしらの渡世の邪魔をするこの親父を、なんで止めだてなさるのだへ

(P 39-1)

### (18) 民谷伊右衛門↓四谷左門

アイヤ、チト御待ち下され。これはあなたのお言葉とも

存じませぬ。舅は親なり、甥は倅。たとへお岩と別れまし  
たとて、あなたは正しく実の親……左門様、なぜまたお岩  
めを返しては下さりませぬ。互いに飽きも飽かれませぬ仲  
ことにはこのほど懷妊致し、子まで儲けし二人が仲。なに  
があなたのお氣に入らいで (P 41・13・14 P 42・7)

(19) 宅悦↓直助

あなたはなんぞお望みは、大か小かネ……エ、章門を  
おすゑなさるのでござりますか……さやうなら、ゆるりと  
なされませ。すぐに、あの障子の内へお出でなされい

(P 62・2)

(20) 民谷伊右衛門↓伊藤喜兵衛

イヤ御隠居、あなたのそれにて洗うてお出でなさるゝは、  
日貫なぞの類でござるかな。さやうかな (P 153・5)

(21) 庄七↓小塩田又之丞

モシくしらをお切りなされますな。あのソウキセイ  
は、私の店でも、四谷の方から下質に取つた品でござりま  
す。あなたがその御病氣に御入用なら、先様と御対談なさ  
るがようござります。どうぞ薬は私に御返しなされて……  
イ、エサ、モシわたしがやはらで申すうち、お返しなさる  
が、あなたのお為でござりませうぞへ (P 319・7・12)

(22) お梅↓伊藤喜兵衛

イエく、私はやはりこれがよろしうござりますけれど、  
あなたがさぞ御氣まだるう思し召しませうと存じまして

(P 18・5)

(23) お榎↓お梅

ほんに私と致しました事が、御新造様からお楊枝もお言  
ひつかり申して参つたに、とんとうち忘れましてござりま  
す。幸ひあれにござりまするが、どのやうなのがよろしう  
ござりませうやら、おなぐさみに、あなた、御覽なされま  
せ (P 26・2)

(24) お袖↓佐藤与茂七

モシ、私はあなたにお願ひがござります……サア、申し  
にくい御無心ながら、私がかういふ事に出来まする訳、お聞  
きなされて、不憫と思し召し、どうぞ一緒に臥せりまする  
事は

(25) お榎↓お弓

(P 69・8)

せめて御回向なされます守袋、かへつてあなたのもの思  
ひのたねともなりませう。こりやかう致しませう。明日辺  
り、私も靈岸様へ持参致して、こりや納めて参りませう  
(P 209・1)

(26) お花↓赤垣伝蔵

なんのあなた御馳走と申すではござりませぬが

(P 307・7)

これらの用例に現れた対応語を図表に整理すると、対応表3  
図になる。

(対応表3図参照)

このように「あなた」の語群では、対称の動作・存在に關す

対応表3 図「あなた」

女					男					対 称	
お花 ↓赤垣伝蔵	お横 ↓お弓	お袖 ↓与茂七	お横 ↓お梅	お梅 ↓喜兵衛	庄七 ↓又之丞	伊右衛門 ↓喜兵衛	宅悦 ↓直助	伊右衛門 ↓四谷左門	つぶ六 ↓伊右衛門	尾扇 ↓お梅	話し手 ↓聞き手
あなた	あなた	あなた	あなた	あなた	あなた	あなた	あなた	あなた	あなた	あなた	代名詞
くござりませぬ	御回向なされませう もの思ひのたねともなりませう	お聞きなされて 思し召し 臥せりまする		思し召し 御気まだるう	お切りなされまするな くなさる くござります お返しなされる	くござる 洗うてお出でなされる	くござりませぬ くござりませぬ くござりませぬ	返しては下されませぬ お気に入り	止めだてなされるのだへ	くござります 御意に入りましたらうな	動詞
	ます				ます まする ます		ます			ます ました	助動詞
			御覧なされませ		御返しなされ		くなされませ お出でなされい	お待ち下され			命令表現
	わたくし	わたくし	わたくし	わたくし	わたくし わたし				わしら		代名詞
申す	納めて参りませう	致して 出まする	お願いがござります 申しにくい	致しました おゑひつかり申して参つた 忘れましてござります	下質に取つた くござります 申す			存じませぬ 別れました	存じませぬ	くござつて 断ち物でござります	自 称 動詞

る動詞に丁寧語の「～ござる」に助動詞「ます」の付いた「～ござります」や「～ござりますか」のように終助詞「か」のついたもの、もしくは「～ござる」のみのもの。「お返しなざる」「おすゑなざる」「お出でなざる」といった「お～なざる」という尊敬を表す表現。もしくは「～なざる」のみのもの。「返しては下さりませぬ」は、尊敬の動詞「下さる」(連用形)に丁寧の助動詞「ます」(未然形) + 否定の助動詞「ぬ」の付いたもの。「止めたてなざるのだへ」は、尊敬の「なざる」(連体形)に格助詞「の」 + 断定の助動詞「だ」 + 終助詞「へ」の付いたもの。どの対応語も敬語表現が使用されている。命令表現でも同様で、尊敬の「お～なざる」という形である「お出でなされい」「お返しなされ」や、さらに丁寧をあらわす助動詞「ます」 + 終助詞「な」の付いた「お切りなされますな」といった形、もしくは尊敬の「なざる」に「ます」の命令形の付いた「～なされませ」が対応している。

また、対応する自称の動作・存在を表す動詞にも「取った」という平常動詞もみられるが、「存じませぬ」「申す」といった謙讓語や、「～ござって」「断ち物でござります」といった丁寧語との対応が基本であることから、対称に対しての高い敬意がうかがえる。

女性語の場合も男性語と同じように、対称の動作・存在に関する動詞には、尊敬を表す「お(ご)～なざる」の形の「お聞きなされて」や、助動詞「ます」の付いた「御回向なされます」、尊敬語「思し召す」等が対応している。また、丁寧を表す助動

詞「ます」や丁寧語である「～ござります」といった形も見られる。命令表現でも「御覧なされませ」といった尊敬語 + 丁寧語(助詞)の形が現れている。また、自称の動作・存在を表す動詞にも「申す」「存ずる」「参る」などといった謙讓語や、丁寧語の「～ござります」など、敬語表現が対応している。

このように、「あなた」の語群は敬語表現との対応が基本となっており、男性語、女性語ともかなり敬意の高い待遇表現であると考えられる。

次に対称代名詞「あなた」の使用において、基礎となる待遇意識の把握のために、「話し手↓聞き手」の関係を調査し図表Fに整理する。

#### (図表F参照)

このように「あなた」の語群は、そのほとんどが目上を示している。

これらの結果より「あなた」の語群は、かなり高い敬語表現との対応を基本とし、目上に対して使用する語であると考えられる。

#### 6、「あなたがた」

「あなたがた」の使用例は全部で五例である。その中で、二例は男性による使用例であるが特別用法のものである。残り三例は女性による使用例となっている。「あなたがた」も使用数が少ないが、先と同様「あなた」の複数形であるため、その待遇が同種の待遇段階であるかを知るためにここで扱うこととする。



図表F

代名詞	頁	行	性別	話し手	聞き手	性別	待遇	備考
あなた	26	11	男	尾扇	お梅	女	↑	
あなた	39	1	男	づぶ六	民谷伊右衛門	男	↑	
あなた	41	2	男	運哲	民谷伊右衛門	男	↑	
あなた	41	13	男	民谷伊右衛門	四谷左門	男	↑	
あなた	41	14	男	民谷伊右衛門	四谷左門	男	↑	
あなた	42	7	男	民谷伊右衛門	四谷左門	男	↑	
あなた	62	2	男	宅悦	直助	男	一↑	
あなた	96	13	男	伴助	秋山長兵衛	男	↑	
あなた	97	1	男	伴助	秋山長兵衛	男	↑	
あなた	153	5	男	民谷伊右衛門	伊藤喜兵衛	男	↑	
あなた	175	11	男	宅悦	民谷伊右衛門	男	↑	
あなた	308	11	男	仏孫兵門	赤垣伝蔵	男	↑	
あなた	319	7	男	庄七	小塩田又之丞	男	↑	
あなた	319	12	男	庄七	小塩田又之丞	男	↑	
あなた	335	14	男	小仏小平	小塩田又之丞	男	↑	
あなた	340	12	男	仏孫兵門	小塩田又之丞	男	↑	
あなた	377	6	男	進藤源四郎	浄念	男	↓	
あなた	18	5	女	お梅	伊藤喜兵衛	男	↑	
あなた	18	7	女	お横	お梅	女	↑	
あなた	26	2	女	お横	お梅	女	↑	
あなた	29	5	女	お横	伊藤喜兵衛	男	↑	
あなた	69	8	女	お袖	佐藤与茂七	男	一↑	
あなた	152	5	女	お弓	秋山長兵衛	男	↑	
あなた	155	7	女	お弓	民谷伊右衛門	男	↑	
あなた	157	8	女	お弓	民谷伊右衛門	男	↑	
あなた	157	10	女	お梅	民谷伊右衛門	男	↑	
あなた	158	2	女	お弓	民谷伊右衛門	男	↑	
あなた	161	4	女	お弓	伊藤喜兵衛	男	↑	
あなた	193	10	女	お梅	民谷伊右衛門	男	↑	
あなた	196	10	女	お横	お梅	女	↑	
あなた	209	1	女	お横	お弓	女	↑	
あなた	299	1	女	お花	小塩田又之丞	男	↑	
あなた	300	7	女	お花	小塩田又之丞	男	↑	
あなた	305	1	女	お花	赤垣伝蔵	男	↑	
あなた	306	11	女	お花	赤垣伝蔵	男	↑	
あなた	307	7	女	お花	赤垣伝蔵	男	↑	
あなた	307	11	女	お花	赤垣伝蔵	男	↑	
あなた	特47	14	男	奥田庄三郎	伊藤喜兵衛	男	↑	口真似
あなた	特53	3	男	佐藤与茂七	尾扇	男	↑	口真似
あなた	特53	6	男	佐藤与茂七	尾扇	男	↑	口真似
あなた	特53	13	男	佐藤与茂七	尾扇	男	↑	口真似
あなた	特54	3	男	佐藤与茂七	尾扇	男	↑	口真似
あなた	特358	5	男	秋山長兵衛	民谷伊右衛門	男	↑	夢の場面
あなた	特361	9	女	お岩	民谷伊右衛門	男	↑	夢の場面
あなた	特364	3	女	お岩	民谷伊右衛門	男	↑	夢の場面

(27)

お袖↓伊藤喜兵衛・尾扇・お横等  
申し、あなた方は、高野の御家中でござりまするナ……  
サア、それならば売られませぬゆゑ……サア、あまり御威

男性語は二例とも特別用法であるため、女性語のみ考察を加えることとする。また、女性語についても使用例が少ないため、推測に止める。

次に具体的な使用例を挙げる。

(28)

お横↓民谷伊右衛門・秋山長兵衛等  
なにしにさやうな御心配、御無用にあそばしませ。私も、  
もうおいとま仕りませう……ハイ／＼あなた方もおゆるり  
と。サ、茂助さんとやら

勢がつよいゆゑ、御求めなされたその上で、御意に入らぬ  
その時は、またどのやうなおたゝりを、受けまいものでも  
ないゆゑに、それでどうも売られませぬわいな

(P 2715)

(P 14411)

対応表4図「あなたがた」

話し手↓聞き手		代名詞	動詞	助動詞	命令表現	代名詞	自称 動詞
女 お弓↓長兵衛 官蔵等	お袖↓喜兵衛 尾扇等	あなたがた	～ござりまするナ 御求めなされた 御氣に入らぬ	～まする ～ませぬ			売られませぬ 受けまい 売られませぬわいな
	お横↓伊右衛門 長兵衛	あなたがた	あそばしませ			わたくし	仕りませう
		あなたがた	～ござりませう ～ござりまする				

(29) お弓↓秋山長兵衛・関口官蔵・伴助

サ、御粗末にはござりませうが、御吸物にて御酒一献  
……イエ、伊右衛門様へは外に上げます御吸物がこ  
ざります。マア、あなた方、御粗末ながら

(P154-16)

これらの用例に現れた対応語を図表に表すと、対応表4図に  
なる。

(対応表4図参照)

このように「あなたがた」の語群では、対称の動作・存在に  
関する動詞に、丁寧語である「ござる」に助動詞「ます」の付  
いた「ござりまする」「ござりませう」等がある。また、尊敬  
語「お求めなされた」も見受けられ、命令表現では「あそばし  
ませ」という尊敬語も対応している。

対応する自称の動作・存在に関する動詞では、「売る」に丁  
寧の助動詞「ます」+ 否定の助動詞「ぬ」が付いた「売られ

ませぬ」、さらに終助詞「わい」の付い  
た「売られませぬわいな」。謙譲語であ  
る「仕りませう」も対応している。「受  
けまい」という平常動詞も見られるが、  
文末では敬語表現である「売られませぬ  
わいな」が対応している。  
次に、待遇意識の把握のために、「話  
し手↓聞き手」の関係を調査し図表Gに  
示す。

(図表G参照)

このように、待遇関係も目上の待遇と  
いうことで一致している。

したがって「あなたがた」は、敬語表  
現との対応が基本であり、待遇意識にお  
いても目上に対するものであると思われ

図表G

代名詞	頁	行	性別	話し手	聞き手	性別	待遇	備考
あなたがた	27	5	女	お袖	伊藤喜兵衛・尾扇等	男	↑	
あなたがた	144	1	女	お横	長兵衛・官蔵等	男	↑	
あなたがた	154	6	女	お弓	長兵衛・官蔵等	男	↑	
あなたがた	特48	6	男	伊藤喜兵衛・尾扇等	奥田庄三郎	男	↑	口真似
あなたがた	特51	13	男	佐藤与茂七	伊藤喜兵衛・尾扇等	男	↑	口真似

ることから、「あなた」と同種の待遇段階であり、「あなた」の複数形であると考えられる。

## 7、まとめ

本稿では「おまへ」「おまへがた」「あなた」「あなたがた」の四語についての待遇表現価値を明らかにするために考察を行ってきた。これまでに述べてきたように「おまへ」と「あなた」を、対応語や話し手と聞き手の待遇関係の面を比較し、その待遇表現価値を考えると、「あなた」は目上の相手に対して高い敬語表現を使用しているが、「おまへ」では、目上かやや目上だけでなく、ほぼ対等の関係の相手にも使用し、対応語は敬語表現が対応するが、音転したやや砕けた敬語表現も見られる。したがって「あなた」の方が「おまへ」よりやや高い待遇表現であると考えられる。なお、男女の使用の差は今回の調査では見られない。

本稿では、『東海道四谷怪談』における以上四語をのみを扱ったが、今後その他の人称代名詞についても述べていきたいと思う。

注1 郡司正勝 『新潮日本古典集成 東海道四谷怪談』 昭和56年

新潮社

注2 山崎久之 『国語待遇表現体系の研究 近世編』 昭和38年

武蔵野書院

## 参考文献

- ・河竹繁俊 評釋 江戸文学叢書 第5巻 『歌舞伎名作集 上』 講談社
- ・山崎久之 『続 国語待遇表現体系の研究』 平成2年 武蔵野書院
- ・山崎久之 『増補 補訂正版 国語待遇表現体系の研究』 平成16年 武蔵野書院
- ・小島俊夫 『後期江戸ことばの敬語体系』 昭和49年 笠間書院
- ・辻村俊樹 『待遇語法』 『敬語の史的研究』 昭和43年 東京堂
- ・大石初太郎 『待遇表現の体系』 『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』 昭和51年 表現社
- ・鶴飼伴子 『四代目鶴屋南北論 — 悪人劇の系譜と趣向を中心に —』 平成17年 風間書房
- ・井草俊夫 『鶴屋南北の研究』 平成3年 桜楓社
- ・塩見鮮一郎 『四谷怪談地誌』 平成20年 河出書房新社